

ポローニア

paulownia

vol. **33**

絵:「夜の道」宇根ちさと(筑波大学附属高等学校3年)

目次

- 2 教育長挨拶
巻頭言「多様性という今日から明日に向かうために」◆石隈利紀
平成26年度筑波大学附属学校教育局主催
公開教員研修会・附属学校研究発表会
が開催される
◆附属学校教育局学校支援課
- 3 講演「ダウン症の娘と共に生きて」
講師:書家 金澤泰子さんの内容紹介
◆附属学校教育局研修委員会
金澤翔子さんとの書道交流会
～共に生きる～
◆河場哲史
- 4 「クーベルタン-嘉納
ユースフォーラム2015」の開催
◆中塚義実
オリンピックを学ぶ オリンピックで学ぶ
◆関野智史
- 5 杉本選手がお祝いにきてくれました!!
◆根本文雄
ボッチャ交流会準優勝
◆小坂桂子
- 6 ブラインドパラスポーツシンポジウムを
開催ー筑波大学理療科教員養成施設ー
◆宮本俊和
ブラインドサッカー交流ー附属中・駒場中高
等学校・視覚特別支援学校の生徒間交流ー
◆岩崎彰治/横尾智治/長岡 樹
- 7 韓国国立ソウル聾学校とのスカイプ交流
◆眞田里佐/佐坂佳晃
研究発表会日程表
- 8 第10回「科学の芽」賞募集要項





TOSHINORI
ISHIKUMA

多様性という今日から明日に向かうために

筑波大学理事・副学長、附属学校教育局教育長 石隈利紀

筑波大学は来年度から6年間の第3期中期目標・中期計画の案を作成しています。その案に、「グローバル(global)」「ダイバーシティ(diversity)」「インクルーシブ(inclusive)」という言葉が登場します。どれも今日のリアリティとめざす方向を示すもので、共通の考え方をもっていきます。

「グローバル」とは、**地球全体の、世界的なという意味です**。グローバルには、問題を起こす側面と問題解決の側面があります。1960年のチリ地震は日本の太平洋沿岸に津波を起こしましたが、2011年3月の東日本大震災の際、被災地の子ども・学校支援チームに関わった私は、震災直後から「世界学校心理学会」の仲間の資料提供・助言などの支援をメールやスカイプで受けました。グローバルは問題の広がりも早く、解決も早い(可能性がある)という、スピードを連想させます。

「ダイバーシティ」とは、**多様性という意味です**。多様性における違いとは、性別・年齢・人種・国籍など見える違いや、文化、宗教、育った環境、経験、あるいは価値観など見えない違いがあるとされています。障害など精神的・身体的特徴も違いのひとつです。多様性は問題(葛藤)が生まれる土壌にもなり、豊かな発展の力にもなります。そこでさまざまな違いを尊重して受け入れ、互いの違いを強みとして活かそうという姿勢が鍵になります。アメリカでは教員や心理職になるためには、児童生徒のダイバーシティを理解しダイバーシティ共生を促進する能力をつけることが必須であると言われています。

そして「インクルージョン(インクルーシブ)」とは、**異なる社会的、文化的、教育的な特徴をもつ者を受け入れるという意味です**。私の尊敬するコミュニティ心理学の日本の草分けである山本和郎先生は、コミュニティは「さまざまな異なる身体的心理的社会的文化的条件をもつ人々が、だれもが切りすてられることなく共に生きることを模索する地域社会、あるいは組織や集団」であり、人は自分たちの責任で主体的に生きるとしています。インクルージョンにはコミュニティの発想があります。

つまり、「グローバル」、「ダイバーシティ」、「インクルージョン」が意味するのは、**多様な人々や文化の交流が盛んで速度を増すなか、一人ひとりを尊重する社会をめざしていこうという考え方**です。そして日本・世界の未来を担う子どもたちに、「自分と他者を尊重して一緒に生きる力」を涵養することが、私たちの仕事であると思います。

平成26年度筑波大学附属学校教育局 主催 公開教員研修会・附属学校研究発表会が開催される

附属学校教育局学校支援課

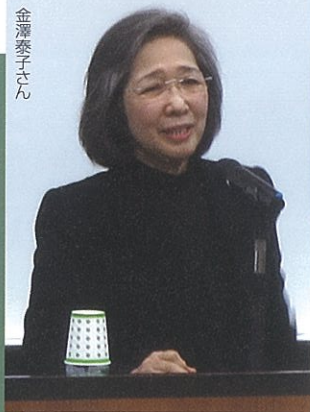
2月28日、筑波大学附属学校教育局は、平成26年度附属学校教育局主催公開教員研修会及び附属学校研究発表会を、東京キャンパス文京校舎を会場に開催した。

この研修会は、教職員の幅広い知見を得るための一環として開催し、学内教職員及び学外からの参加も含め131名の参加があった。書家の金澤泰子氏による「ダウン症の娘と共に生きて」と題した講演が行われた。昼食休憩の後に、筑波大学附属久里浜特別支援学校の子どもたちの様子を映像で紹介した。

研究発表会は、筑波大学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、広く参加者から意見を求めることを目的に開催した。石隈利紀附属学校教育局教育長の挨拶の後、附属学校教育局が取り組んでいる先導的教育拠点・教師教育拠点・国際教育拠点という「3つの拠点構想」に基づいて、計5課題の研究発表を行った。各附属学校の活動報告としてのポスターセッションも

含め、「国際教育・グローバル人材育成」をテーマに掲げて実施した。附属学校教諭、本学教員をはじめ100名を超える参加があった。





講演「ダウン症の娘と共に生きて」 講師：書家 金澤泰子さんの内容紹介

附属学校教育局研修委員会

「翔子の書を見て、多くの人が涙を流します。IQは低いが感性豊かで、生まれたままの魂を書に込めているからでしょう。そこには、華嚴経の『唯心経』の哲学があると思っています。」この言葉で講演が始まりました。

その後、次のようにお話が続きました。「わが子がダウン症であることを知り、苦勞の20年間を過ごしました。しかし、翔子はいつもニコニコ。他人と競争することも羨むこともありません。親子の間には何も障害はありません。」「翔子は五歳で書の道に入りました。小学校4年に進級するときに普通学級を断られ、有り余った時間で般若心経の写経を何回もやらせました。そこには涙の後がありました。ここで楷書での筆遣いをマスターしました。」「生前に主人が言っていた通りに、20歳のときに銀座の

画廊で個展を開き、一躍脚光を浴びました。同窓生からは『ビリの翔子がトップになったね』との嬉しい声。」「翔子はいまを生きています。後悔することも自他を区別することもせず、『人に喜んでもらいたい』という力で字を書きます。料理も得意で、おいしいと喜ぶと更にがんばります。そして年中、人に恋をしています。」「翔子は不思議な子です。国民体育大会開会式での書、国連でのスピーチなど、来た仕事に一所懸命に取り組み、そして成し遂げてしまいます。」

最後に、温泉の湯船に浸かりながら「お母さん、いま幸せ？」と訊ねられたときの話で幕を閉じました。「涙が出てきました。翔子が生まれたときに『日本一悲しい女』と思っていたわたしは、いま『日本一幸せな女』です。」

金澤さん、素敵で勇気づけられる講演をいただき、ありがとうございました。

金澤翔子さんとの書道交流会 ～共に生きる～

附属久里浜特別支援学校 小学部主事 河場哲史



附属久里浜特別支援学校小学部では、平成26年12月11日(木)に、書家の金澤翔子さんとお母様の泰子さんをお迎えして書道交流会を実施しました。今回の交流会は、①揮毫(きごう)の様子を見て、書道に興味や関心をもつこと、②お正月に向けて書き初めを体験すること、③筆や墨を使って自分なりの表現をすること、の3点を目標としました。

交流会当日は、まず翔子さんの力強い揮毫(きごう)のパフォーマンスを見学しました。大きな筆で、ステージいっぱいに広げられた半紙に『共に生きる』と書いてくださいました。子どもたちは翔子さんのダイナミックな筆使いの勢いに圧倒され、最後までその様子を興味深そうに見ていました。その後は、自分たちも「やってみたい」、「表現してみたい」という気持ちが高まり、一人一人が思い思いに、半紙に自分なりの表現をすることができました。子どもたちの力作が会場にたくさん並べられました。

翔子さんから直接手を取って指導していただいたり、手首で書くのではなく体全体で書いた方がいい文字が書け

るということをアドバイスしていただいたりしました。あわせて、実際に目で前で本校の校歌にもあるフレーズの『のびのび』を翔子さんに書いていただき、泰子さんに解説していただくといった、夢のような時間を過ごすことができました。また、泰子さんから直接作品を褒めてもらったり、激励の言葉を頂いたり、大変貴重な体験をさせていただきました。この交流会をきっかけに、書道に興味をもち、書道が大好きになった子どもがとて増えたように思います。

当日のパフォーマンスで書いていただいた作品『共に生きる』は、本校教室棟中央廊下に展示しております。本校へお越しの際は、是非ご覧ください。





大学会館前の嘉納治五郎像にて
参加生徒・スタッフ全員集合

「クーベルタン—嘉納 ユースフォーラム2015」の開催

CORE運営委員／附属高等学校 教諭 中塚義実

バランスのとれた人間形成と世界平和への貢献は、クーベルタンも嘉納治五郎も願っていたことである。普段は交わることのない他校生との2泊3日は、オリンピズムの何たるかを感じ、いま何をすべきかを考えるきっかけとなったのではないだろうか。

なお8月29日～9月5日に開かれる国際YFへの派遣生徒7名は、筑波大附高3名、自由学園2名、帝京・中京から各1名となり準備を進めている。

2015年3月13日(金)～15日(日)、筑波大学で標記フォーラムがCORE主催で開催された。今夏スロバキアで開かれる第10回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの参加生徒7名の選考の場であるが、まずは日本の高校生にオリンピズムを学ばせる(感じてもらう)ことが目的である。日本独自のオリンピック教育を国内外に示すという意図が「クーベルタン—嘉納ユースフォーラム」という名称に込められた。

はじめての国内YFには、筑波大学附属高校(9名)、附属駒場(3名)、附属坂戸(3名)と、趣旨に賛同した帝京高校(4名)、自由学園(6名)、中京大学附属中京高校(5名)から男女各15名、計30名の高校生が集まった。初日は学校紹介と「野性の森」での野外活動、2日目は嘉納治五郎やクーベルタンについての講義、陸上競技場でのスポーツテスト(走・跳・投)、英語によるグループ討議、最終日はグループ討議の発表と筆記テストと、盛り沢山の2泊3日であった。



「野性の森」でのグループ活動で
一気に打ち解ける高校生

「2020年へ向けて自分たちは何をすべきか」
について討議。まずは英語で90分間。
その後日本語で振り返り。



オリンピックを学ぶ オリンピックで学ぶ

附属中学校 教諭 関野智史

2月20日(金)に附属中学校第一学年生徒全員を対象に、『オリンピックを学ぶ オリンピックで学ぶ』という授業が行われました。

授業の概要は、オリンピックという言葉からイメージするもの、オリンピックシンボルを何も見ないで書いてみようという導入があり、いつも目にしているはずのシンボルも、使われている色はわかるが、その順番がわからないなど、生徒がハッとする表情が見られました。また、オリンピックと嘉納治五郎先生のつながり、同時に、嘉納先生と附属中のつながりも再確認しました。加えて、嘉納先生の考えにとどまらず、近代オリンピックを創設したクーベルタン男爵とその考え、オリンピックモットー、オリンピックムーブメントにも触れ、オリンピックから何が学べそうなのかということと一緒に考えました。

授業後半では、オリンピックから学ぶべき内容の1つ、フェアプレーについて取り上げ、「フェアプレー」という言葉から連想することをお互いに発表しました。そして最後に、1992年バルセロナオリンピック男子マラソン谷口浩美選手の転倒シーン及びその後のインタビュー映像を視聴し、「こけちゃいました」の言葉から、最後まであきらめず走りきる姿、誰のせいにもしなかった姿を学び、フェアプレーの意味、オリンピックの価値とは何であろうかということについて意見交換しました。

これまで附属中学校では、保健体育での体育理論や総合学習などにおいてオリンピックをテーマに授業を行うことはありましたが、このように学年全体を対象として行うオリンピックの授業は初の試みでありました。今後もオリンピックから様々なことを学んでいく活動の実践を積み重ねていく予定です。

なお、同授業はNHKの取材及び文部科学省の授業視察があり、後日、文部科学省でオリンピック教育推進に関する会議があった日、夜のニュースにおいて様子が一部放映されました。



杉本選手がお祝いに きてくれました!!

附属大塚特別支援学校 高等部主事 根本文雄



ロンドンオリンピック柔道銀メダリストの杉本美佳選手(コマツ所属)が2015年2月26日に本校高等部に来てくださいました。実は杉本選手の来校は、今回で2回目。2年前に来校した時に高等部1年生だった生徒達が卒業するということで、お祝いと激励に来てくださいました。特に今回は、高等部のみの歓迎交流会となり、1、2年生は「卒業生を送る会」の総合学習の一環として取り組みました。杉本選手の好きなことをインターネットで調べる、歓迎のパネル製作、プレゼントの準備や花束の購入などを生徒が主体的に行い、まさに手作りの会となりました。当日は、杉本選手の入場のあと、生徒代表歓迎の挨拶、つづいて「今咲き誇る花たちよ」を歌い、歓迎の気持ちを表現しました。そして杉本選手からお祝いの言葉をいただきました。選手時代に練習がきつかったことや試合に向かう緊張感など、大変苦労したことを語っていただきました。それでも頑張れた要因は、「苦しい時ほど笑顔で!」でした。自分の体験を通して伝えていただいたこの言葉は、色紙にもしていただき、3年生の卒業文集にも載せました。その後の生徒同士の会話の中にも「苦しい時は?」「笑顔ダヨね!」と合い言葉のように確認する姿も見られました。交流会の最後には、杉本選手と福岡大学の坂本さんによる演舞を見せていただきました。実際に大会で勝った時の技を目の前で見せていただき、そのあまりの迫力に生徒達の興味関心は最高潮に盛り上がりました。「杉本選手と勝負してみたい人?」と聞かれると、男子を中心に手が上がり、結局、女子も含め全員が杉本選手と対戦しました。ほぼ全員が「投げ飛ばされました～」と嬉しそうに語る姿が印象に残りました。交流会の後は、高3の教室で一緒に給食を食べ、楽しく懇談をして、生徒たちは杉本選手の笑顔に励まされた一日となりました。



ボッチャ交流会準優勝

附属桐が丘特別支援学校 教諭 小坂桂子

平成27年3月7日(土)、附属桐が丘特別支援学校の高等部生徒4名が「第1回東京都肢体不自由特別支援学校ボッチャ交流会」の競技部門に参加しました。この交流会は、パラリンピック正式競技であるボッチャへの関心を高め、児童生徒が東京パラリンピックを具体的な目標にして、日々の体育に意欲的に取り組むようになることを目指して開催されました。



参加した生徒たちは、これまで体育の授業でボッチャに取り組んだことはあっても、試合は初めてという者ばかりで、他校の試合の様子を見ている間は、緊張した様子でした。試合経験のある生徒が中心となり作戦を立てて試合に臨んでみたものの、始めは仲間との確認を怠って投球し、ファールを取られてしまう場面もありました。しかし、試合に慣れるにつれ、徐々に声を掛け合い、互いにフォローしながらプレーできるようになり、決勝まで勝ち残ることができました。決勝戦は息をのむ接戦となりましたが、序盤に許したリードを逆転できず、惜しくも優勝を逃しました。

また、今回の交流会にはエイベックス・グループ・ホールディングス所属の車いすテニスプレーヤー藤本佳伸選手が見学に訪れ、昼休みにテニス体験やボッチャ対決するなど、パラリンピアンと交流する経験もできました。

ボッチャ交流会終了後、生徒たちから「楽しかった」「ボッチャをもっとやってみたくなった」「車いすテニスにも興味を持った」といった感想が聞かれました。今後もこのような催しを通して、ボッチャをはじめ様々なスポーツや東京パラリンピックに対する意識が高まり、児童生徒がますますスポーツに意欲的に取り組むようになってほしいと思います。



ブラインドパラスポーツ シンポジウムを開催

—筑波大学理療科教員養成施設—

理療科教員養成施設長

宮本俊和



2020年東京パラリンピックの開催が決まり、我が国におけるパラリンピック競技も競技力向上に力を向けるようになった。筑波大学理療科教員養成施設と附属視覚特別支援学校からは、多くのブラインドパラリンピック選手を輩出してきた。筑波大学理療科教員養成施設は、3月8日、シンポジウム「ブラインドアスリートの発掘と育成」(筑波大学主催)を筑波大学東京キャンパス文京校舎で開催し、約100名の参加者があった。

シンポジウム開催にあたり阿江副学長より挨拶があり、その後、宮本施設長よりシンポジウムの目的について説明があった。

シンポジストには、IPC/IBSA視覚国際クラス分け委員で国立障害者リハビリテーションセンター病院眼科医長の西田朋美氏「視覚クラス分けの意義と方法」、日本スポーツ振興センター2020ターゲットエイジ育成・強化プロジェクトディレクターの衣笠泰介氏「地域から世界へ：ナショナルタレント発掘・育成の仕組みとブラインドアスリートへの応用」、2012年ロンドンパラリンピック水泳メダリストの木村敬一氏「ブランドアスリートの育成について—自身の経験から—」、筑波大学附属視覚特別支援学校教諭の原田清生氏「ブラインドアスリートの育成について—指導者の立場から—」を招き講演を行った。その後、附属視覚特別支援学校OBでパラリンピック日本人最多のメダリストである日本パラリンピアンズ協会会長の河合純一氏と理療科教員養成施設宮本施設長が座長となり討論をした。

会場からは、ブラインドスポーツ選手の発掘や育成については、スポーツ環境の整備やブラインドスポーツを広く紹介する方法を考える必要があるなどの発言があり、また、選手を指導

するコーチや支援スタッフの育成を併せて行うことが重要であるなどの発言もあり、2時間にわたり活発な討論が行われた。



ブラインドサッカー交流

—附属中・駒場中高等学校・
視覚特別支援学校の生徒間交流—

附属視覚特別支援学校 寄宿舎指導員

岩崎彰治

附属駒場中・高等学校 教諭

横尾智治

附属中学校 教諭

長岡 樹

1月10日(土)、附属中・駒場中・高等学校および附属視覚特別支援学校生徒がブラインドサッカーを通して交流を行いました。文部科学省のインクルーシブ教育システム構築モデル事業「交流及び共同学習」の一環として開催したもので、趣旨に賛同した筑波大学蹴球部のメンバーも準備から加わり、80名ほどが参加しての交流となりました。



元Jリーガーの指導の下、準備体操、パス回し等を行った後、アイマスクをつけての誕生月、血液型別に集まるゲームやボールパスの受け渡しなどでは、声を

出す、聴く、どんな情報をいつ、どのタイミングで出すのか、など音声等によって、いかにコミュニケーションをとっていくのかが試され、日頃、視覚による情報に頼っていたことを再確認しました。これらの疑似体験後、フットサルコートの中でブラインドサッカーのルールに従い、チーム対戦を行い、最後は3校生徒、大学生が合同の混合チームで対戦を行いました。当初は、戸惑い気味の附属中・駒場中高生や大学生でしたが、試合を進めるうちに、皆が本気モードになり、1点を取り合う真剣勝負となりました。

試合後の片付けをしながら、あちこちで語り合う姿が見られ、「楽しかったし、もう少しやりたかった。」「見えない、見えにくいとか関係なく、試合ができた。」「障害がある人でも、ない人でもサッカーが大好きなことがわかった。」などの感想が出されていました。サッカーを通しての出会いと繋がり、そしてスポーツの持つ力を実感した交流となりました。



韓国国立ソウル聾学校との スカイプ交流

筑波大学附属聴覚特別支援学校 教諭 眞田里佐／佐坂佳晃

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）中学部では、「伝え合うための英語を含めた表現・コミュニケーション能力の向上」、「異なる言語や文化を学ぶと共に、日本語や日本文化を見つめ直すこと」、「海外の聴覚障害中学生との交流体験」を目的として、2014年より韓国国立ソウル聾学校（以下、ソウル聾学校）中学部とのスカイプによる交流学習を始めました。今回、2014年8月と12月に行った交流学習のまとめと、2015年度以降の交流学習に関する意見交換、及び3回目の交流学習を行うために、2015年2月9日にソウル聾学校を訪問しました。訪問者は本校職員4名と、通訳として同行してくださった筑波大学大学院生1名でした。

ソウル聾学校は、全国に5校ある国立特殊学校の一つで、聾学校としては国内で最も充実した教育内容と施設・設備を誇っています。ソウル市の中心部に位置し、周囲には世界遺産の昌徳宮や宋廟、朝鮮時代最初の王宮である景福宮があり、韓国の歴史や文化を肌で感じることが出来ました。2013年で創立100周年を迎えたソウル聾学校の校舎も煉瓦造りの歴史的な建造物で、観光客が訪れることもあるそうです。

交流当日の朝、まずは本校中学部生徒にFacetimeを利用してソウル市内の様子を伝えました。一番の繁華街である明洞の街並みや地下鉄のカードへのチャージ方法などを見た生徒たちは、街中に日本語の表記が多くあることに驚いたり、地下鉄に向かう途中に美しくそびえたつソウルタワーを眺めたりと、興味津々な様子でした。

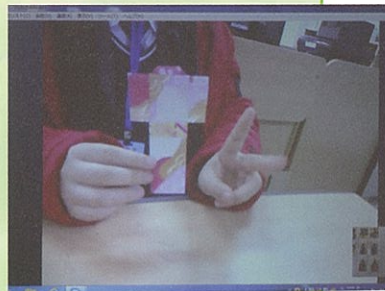
ソウル聾学校に到着し、生徒たちと対面したときには、これまでの交流ですっかり顔見知りになった我々の登場に歓声をあげて迎えてくれました。いよいよ3回目の交流学習が始まり、最初に本校中学部生徒が作ったペン立て（学校で飲んでいる牛乳パックをリサイクルしたもの）としおり、そして2回の交流学習をまとめた模造紙をソウル聾学校の生徒に渡しました。「きれい!」と日本語で喜び、嬉しそうに受け取ってくれました。

今回の交流は日本の伝統的な遊びの紹介ということで、折り紙とけん玉について紹介しました。始めに、折り紙で日本の着

物と韓国の伝統衣装であるチマ・チョゴリを一緒に作りました。本校の折り紙担当の生徒は、韓国語で描かれたスケッチブックをタイミングよく見せながら、見やすい大きさの折り紙を使って丁寧に折り方を説明しました。ソウル聾学校の生徒たちは、好みの和柄の折り紙を選び、慣れない手つきで本校の生徒たちの説明や折り方を確認しながら、上手に折り進めていきました。完成したときには、両校の生徒がスカイプ越しに「出来たよ!」というサインを送り合い、距離を縮めることが出来ました。

初めてけん玉を手にしたソウル聾学校の生徒たちは、本校のけん玉担当の生徒たちの説明に熱心に聞き入っていました。教室のいたる所で笑顔がこぼれ、ソウル聾学校の生徒がけん玉に成功したときには、画面の向こう側から本校生徒たちの「やったー! すごいね!」という歓声と拍手が聞こえてきました。

今回の交流を通して、国や言葉を越えて心と心が繋がる瞬間を何度も目にしました。お互いの国の言葉や共通語である英語、手話や表情というあらゆるコミュニケーションを駆使し、伝えよう分かれようという気持ちが、画面を通じて一つになりました。両校の生徒へのアンケートでは、「文化の違いや学校の様子が分かりとても楽しかった。」「絶対にまた交流をしたい。」という声が多くあったように、生徒一人一人にとって大変有意義な経験となりました。



学校名／名称／開催予定日

平成27年度 附属学校研究発表会等日程表

附属小学校	学習公開・研究発表会 学習公開・初等教育研修会	平成27年6月12日(金)～13日(土) 平成28年2月11日(木)～12日(金)
附属中学校	研究協議会	平成27年11月14日(土)
附属高等学校	教育研究大会 SGH発表会	平成27年12月5日(土) 平成28年2月6日(土)
附属駒場中・高等学校	教育研究会	平成27年11月21日(土)
附属坂戸高等学校	SGH研究大会・総合学科研究大会	平成28年2月18日(木)～19日(金)
附属視覚特別支援学校	理療教育研究セミナー 視覚障害教育研究協議会	平成27年10月9日(金) 平成28年2月20日(土)

附属聴覚 特別支援学校	関東地区聾教育研究会 聴覚障害教育担当教員講習会 聴覚障害早期教育公開研修会 筑波大学連携研究報告会(系と附属聴覚特別支援学校)	平成27年6月18日・19日(金) 平成27年11月18日(水)～20日(金) 平成28年2月19日(金) 平成28年2月下旬(予定)
附属大塚特別支援学校	知的障害教育研究協議会	平成28年2月12日(金)
附属桐が丘特別支援学校	自立活動実践セミナー 肢体不自由教育実践研究協議会	平成27年7月31日(木)・8月1日(土) 平成28年2月4日(木)・5日(金)
附属久里浜特別支援学校	自閉症教育実践研究協議会	平成28年2月11日(木)・12日(金)
特別支援教育研究センター	第19回特別支援教育研究センター主催セミナー 第20回特別支援教育研究センター主催セミナー	平成27年11月7日(土) 平成28年3月28日(月)
附属学校教育局	公開教員研修会、附属学校研究発表会	平成28年2月27日(土)



第10回「科学の芽」賞



朝永振一郎
Asahara Ichirō

ANNIVERSARY
第10回
Since 2006

朝永振一郎記念

主催……筑波大学

後援……日本新聞協会、日本通信社、日本教育新聞社、日本物理学会、日本物理教育学会、日本化学教育学会、日本理化学教育学会、日本地質学会、日本生物教育学会、日本地質教育学会、日本地学教育学会、日本地学教育研究会、文部科学省



筑波大学
University of Tsukuba

「科学の芽」賞募集

作品募集

朝永先生の言葉のように自然現象の不思議を
発見し、観察・実験して考えたことをまとめましょう。
素直な疑問・発見があるものを募集します。

よく観察してたしかめそして
考えることこれが**科学の芽**です

ふしぎだと思ふこと
これが**科学の芽**です

そうして最後になぞがとける
これが**科学の花**です

募集期間

2015 8月20日 木 → 9月30日 水

（前印有効）

「科学の芽」賞に
輝いた作品集



■提出方法 レポート用紙（A4判）10枚以内 ※応募作品は初稿として返却しません
■応募資格 小学校3学年～中学校、高等学校（高等専門学校3年次までを含む）、
 中等教育学校、特別支援学校の個人もしくは団体
 ※小学生部門、中学生部門、高校生部門に分けて公募します。
■審査方法 筑波大学教員、筑波大学附属学校教員及び後援団体関係者などが審査・選考
 平成27年11月下旬、筑波大学ホームページに掲載
 ※受賞者本人は別途通知します ※受賞作品は筑波大学のHPに公開します
■賞・記念品 「科学の芽」賞の受賞者には学長より賞状と記念品を贈呈
 （その他、奨励賞・努力賞があります） ※応募者全員に記念品を贈ります。
■賞状・発表会 平成27年12月19日（土） 於、筑波大学学生会館
■送付先 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1 筑波大学「科学の芽」賞 実行委員会

お問い合わせ先 **03-3942-6806** 筑波大学「科学の芽」賞実行委員会（学校支援課） E-mail: kagaku@un.tsukuba.ac.jp
 詳しくは、筑波大学ホームページ「科学の芽」賞を参照 http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagaku/index.html

④ <http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagaku/index.html>

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.33

発行日……平成27(2015)年 6月30日

発行者……附属学校教育局教育長 石隈利紀

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙: U-Itimax [日本製紙]

